The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	バークリと知覚の相対性による議論
Author(s)	中谷, 隆雄
Citation	哲学論叢. 1981, 8, p. 51-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66781
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

バークリと知覚の相対性による議論

中谷隆雄

一

バークリの哲学は、「非物質論(immaterialism)」(iii, 259)[1]という名が示す通り、物質論に対する批判の上に成り立っているが、その物質論批判には、周知のesse est percipi原理の他に、対人立証の議論(argumentum ad hominem)が使用されることも少なくない。対人立証の議論とは、ロックの定義を借りれば、「或る人に対して、その人自身の原理や譲歩から導かれた帰結を押しつけること」[2]と言える。それはバークリに於て次の様な形をとる(§18)。

①我々の観念を産出するのに外的物体(external bodies)を想定することが必要である。

②夢や狂気やそれに類したことで我々が外的物体なしに観念を持てることはあまねく認められている。[3]

③それゆえ、外的物体を想定することは我々の観念の産出に必要ない。

物質論者の説(①)に対し、物質論者も認めざるをえない事実(②)を提出することにより望む結論(③)が得られる。この様に、何らかの説を主張する人に対して、その説に直接関わることなく、その人も承認せざるをえない事

実を提出するだけで反駁を行うのが対人立証の議論[4]と言える。[5]

この様な仕方の批判は、いかなる前提にも基づいていないという点で、バークリの物質論批判に於て、ひとつの論理的に独立した要素を成している。ただ、対人立証の議論では、批判すべき説に直接関わることがないので、物質は存在するという説は成立しない、ということが示せるだけで、物質は存在しない、という結論をそれ自体として得ることはできない。対人立証の議論で注意すべきことは、この議論は論敵の不整合を衝く限りのもので、議論による反駁によって何らか特定の結論を導き出せるものではないということである。

二

ところで、第一・第二性質の区分説というのもバークリにとってひとつの物質論であった。というのは、その説では、第二性質は心のうちにあるが、第一性質は外的対象 (external objects) のうちにあるとされるからである。そして、第二性質が心のうちにあるのは、その内容がそれを知覚する人間あるいは感官 (senses) に相対的であるゆえとされている。例えば熱が心のうちにあることは次の様に示される〔知覚の相対性による議論 (the argument from the relativity of perception)〕。

①ひえた右手とあたたまった左手を同時に同じぬるま湯に入れたとき、右手が暖かく左手が冷たく感じられることがある（知覚の相対性）。

②外的対象の性質が同時に相異った内容を持つのは不合理である。

③それゆえ、熱は心のうちに存在しなくてはならない。

他の第二性質についても知覚の相対性という事実があり、同様の議論でそれらが心のうちにあることが示される。その結果、第一性質と第二性質の区分が正当化されるという。その様な第一・第二性質の区分説をバークリは『原理論』で攻撃する。

「さらに、甘さは本当は美味な事物のうちにないことは証明されている。なぜなら、熱のある場合とか、その他の仕方で損なわれた味覚の場合には、事物が変わらないままで、甘さが苦さに変わっているからである。」(§14)

「要するに、色や味が心のうちにのみ存在することを明白に証明すると考えられている諸議論を誰かに考察させてみよ。そうすれば、その人は延長、形、そして運動について同じ事柄を証明するのにそれらが等しい力で用いられることを見出すであろう。」(§15)

知覚の相対性という事実は第一性質についてもあり、知覚の相対性ゆえに第二性質が心のうちに存在するとされるなら、同じ理由で第一性質も心のうちに存在しなくてはならない、[6] というのがバークリの言い分である。バークリのこの批判は、知覚の相対性による議論そのものに直接関わることなく、ただ、第一・第二性質の区分を主張する者たちが承認せざるをえない事実—第一性質に於ける知覚の相対性という事実—を提出することにより、第二性質のみ心のうちに存在するという説は成立しないことを示しているにすぎないという点で、対人立証の議論と言える。バークリは、ここでは議論の性格を把握して、その様な論法は「延長や色が外的対象のうちにないということを（つまり、心のうちにあるということを）証明する程のものではなく、どれが対象の真の延長か色かを我々は感官によっては決めることができないということを証明するにすぎない」（括弧内筆者）(§15) と言明している。従って、右の批判によって、第一性質も、第二性質と共に、心のうちにある、と結論づけられているわけではない。第一・第二性質の区

分を主張する者は、自身の論法即ち知覚の相対性による議論を有効なものとみなせば、両性質共心のうちにあることを自ら認めてしまうことになるということが指摘されているにすぎない。

この様な第一・第二性質の区分説に対するバークリの批判について二つの問題がある。

三

ひとつの問題はロックに関連したものである。つまり、第一・第二性質の区分に対するバークリの批判はロックに向けられているとされることが多いのであるが、もしそうだとすれば、すでにジャクソン[7]によって指摘されている様に、バークリは明らかにロックの第一・第二性質を正しく把握しておらず、従って、批判は的外れに終わっていることになる。

ロックの「観念」というのは、「心が自分自身のうちに知覚するもの、あるいは知覚や思惟や知性の直接対象[8]」であり、定義という面のみから言えば、バークリと変わりない。しかし、ロックの「性質」というのは、観念を「我々の心のうちに産出する力能(Power)」である。だから、ロックの言う「性質」は、その役割から言って、知覚されうるものではない。確かにロックは次の様に知覚の相対性に言及している。

「観念がかように区別され理解されると、いかにして同じ水が同時に一方の手に冷たさの観念を、そして他方の手に熱さの観念を産出するか理解できよう。それに対し、もしそれらの観念が本当に水の中にあるとすれば、同じ水が同時に熱くかつ冷たいということは不可能である。というのは、我々の手のうちにある暖かさが我々の神経あるいは動物精気の微小分子の或る種或る度合の運動にすぎないと我々が想像するなら、いかにして同じ水が

同時に一方の手に熱さの感覚を、他方の手に冷たさの感覚を産出することが可能か理解できる。[9]」

しかし、ここでは、知覚の相対性は、第一・第二性質の区分を正当化しようとする議論ではなく、逆に、第一・第二性質という概念によって説明されるべき事実として言及されているとみるのが自然である。[10] このことは、ロックの第一・第二性質の背景にある「粒子説(the corpuscularian Hypothesis)」[11]を考慮すれば理解できる。第二性質は、「様々に運動し、様々な形、かさ、数の分子(Particles)」が我々の感官を「感触して(affecting)」[12]我々のうちに観念を産出することによって知られる。そして熱さというのは、「我々の神経の微小分子あるいは動物精気の或る種或る度合の運動にすぎない」という。とすれば、相異った暖かさの両手に対して、その中間の暖かさが及ぼす結果というのは、より高い度合の分子運動のあたたまった手とより低い度合の分子運動のひえた手に対して、その中間の度合の分子運動が及ぼす結果として説明される。即ち、ぬるま湯の分子運動はあたたまった手の分子運動を低下させ、ひえた手の分子運動を増大させることによって、結果として、前者につめたく、後者に暖かく感じさせることになる。この様に、ここでは、あくまで第一・第二性質による説明の例として知覚の相対性が引き合いに出されている様に思える。知覚の相対性によって第一・第二性質の区分を正当化しているという具合にロックのテキスト[13]を読み取るのはきわめて困難である。[14] もしそう読み取るなら、ロックは知覚されえない[15]性質の区分を知覚の相対性によって正当化していると考えねばならないことになる。

いわば、ロックが知覚を、知覚する人間の外側に立って説明しようとして第一・第二性質という概念を提出しているのに対し、バークリはあくまで自分自身知覚する人間として第一・第二性質について考察している。[16] 視覚と触覚の「両感官に共通な或る観念がある」という考えから「第一性質と第二性質の区分が生じた」(T.V.E.E. § 15)とバーク

リが言うとき、そのことが如実に現れている。第一・第二性質は、ロックにとっては知覚を説明する概念[17]であるのに対し、バークリにとってはあくまで知覚の対象である。それゆえにバークリはロックが正当化を行っているとしか思えなかった。ただ、バークリ的解釈を許す様なあいまいさがロックの記述にあったことも確かである。第一性質による観念が物体の「類似物 (Resembrance)」[18]であるとされていることは、第一性質が知覚可能であるかの様に思わせる。また、色、音、におい、味という語が第二性質を意味したり、その観念を意味したりしているという事実[19]もある。ロック自身、「観念が事物そのもののうちにあると、時に私が言うとすれば、それらを我々のうちに産出する様々な性質が対象のうちにあると理解されたい」[20]と述べ、自らのあいまいさを認めてさえいる。

しかし、「バークリが単にロックを反駁していたというのは自明なことではない」[21]と言う注釈家もいる。もしそうだとすれば、バークリがロックを誤解しているとか、批判が的外れであるとか考えるのは見当違いということになる。バークリの批判対象が単にロックではないという確証は見出し難いが、明らかなのは、『原理論』序論の抽象観念説批判では『人間知性論』から直接引用されているが、第一・第二性質批判にはその様な引用もなく、ロックの名も挙がっていないことである。[22]バークリの記述からは、第一・第二性質の区分説には複数の支持者が存在するという以上のことは読み取れない。用語法が類似していること、同一の例(同じ物体が一方の手に冷たく他方の手に暖かい)(§14)を使用していること[23]、そして『哲学評註』の該当個所(76, 78, 112, 326, 534)でロックあるいは『人間知性論』に言及していることからして、批判対象が単にロックでないと言い切れるものではないが、右の事実は留意しておくべきだと思う。

四

第一・第二性質に対するバークリの批判についてもうひとつ問題がある。『原理論』(§15) でバークリが知覚の相対性による議論に対して不満を表明しているというのは既述の通りであるが、『第一対話』ではバークリの代弁者フィロナスが物質論者ハイラスに対し、第二性質が外的対象のうちにないことを、さらには第一性質が外的対象のうちにないことを知覚の相対性による議論で証明しようとしている様に思えるからである。

「**フィロナス**　人を必然的に不合理へ導く諸原理が真でありうるか。

ハイラス　疑いなくそれは真ではありえない。

フィロナス　同じ事物が同時に冷たくて暖かいと考えることは不合理ではないか。

ハイラス　そうだ。

フィロナス　今、あなたの一方の手が暖かく、そして他方の手が冷たくて、それらが両方共同時に中間状態にある同じ器の水に入れられると想定しよう。水は一方の手に冷たく、そして他方の手に暖かく思えないだろうか。

ハイラス　そうなるだろう。

フィロナス　それゆえ我々はあなた自身の諸原理によって、それが本当に同時に冷たくて暖かいと結論づけるべきではないか。つまり、あはた自身承認するところに従って、不合理を信じているとすべきではないか。

ハイラス　そう思えることを認める。

フィロナス　従って、いかなる真の原理も不合理に導かないことをあなたは認めているのだから、諸原理そのも

のが偽なのだ。」(i, 178-9)、〔味覚(i, 180)、におい(i, 180-1)、色(i, 184-6)、延長・形(i, 189)、運動(i, 190)、固性(i, 191)〕

一見したところ、『第一対話』では知覚の相対性による議論が有効だと考えられていて、『原理論』の見解と不整合である様に思える。

『第一対話』の議論も『原理論』と同様対人立証の議論であるとする考え[24]がある。しかし、ティプトンの指摘する様に[25]、知覚の相対性による議論を第二性質について使用し、かつそれを第一性質へ拡張しているのはハイラスではなくフィロナスである。A(第二性質についての知覚の相対性による議論)を主張するならB(第一性質についての同じ議論)を受け入れよ、と言うのと、AとBを共に受け入れよ、と言うのは異なる。対人立証の議論は前者であり、『第一対話』で行われているのは後者である。

ティプトンは『第一対話』と『原理論』各々のコンテキストの相違に着目することによって、両者の間の不整合が見かけのものであることを示そうとする[26]。バークリは、『原理論』では、「知覚されない性質(unperceived qualities)」が外的対象のうちにないことが示されなくてはならないので、知覚の相対性による議論では不充分だと思ったが、『第一対話』では「知覚される性質(perceived qualities)」が心のうちにあることを示せればよいのでそれを使った、というのである。ティプトンによれば、知覚の相対性による議論は「延長や色が外的対象のうちにないということを証明する程のものではなく(doth not so much prove that there is no extension or colour in an outward object.)」(§15)とバークリが言うとき、「延長や色」は知覚されない性質を意味するが、「程のものではなく(not so much)」は全くの否定を意味しない[27]。だから、知覚の相対性による議論は知覚される性質についてはなお証明力を持つと見る

ことができ、その証明力をバークリは『第一対話』で発揮させているという。しかし、右の句には、「どれが対象の真の延長か色かを我々は感官によっては決めることができないということを証明するにすぎない(as that we do not know by senses which is the true extension or colour of the object.)」[28]という節が続いていた。この「延長か色か」は、先行のものとは異なり、知覚される性質を意味していると考えなくてはならない。そうしなければ節全体が有意味とならないからである。文全体を考慮すれば、その様に解釈することは、不可能ではないにしても、不自然の様に思える。

そこで、『第一対話』の方の議論を別の角度から眺めることによって問題をとらえ直してみたい。

『対話』では一貫して物質論批判が展開されているが、注意しなくてはならないのは、各々のコンテキストでどういう意味の物質が批判されているのかということである。バークリの「物質(matter)」は、究極的には、知覚されずに存在するものを意味すると言えるが、『対話』の内容というのは、ハイラスが「物質」の意味を次々と変え、それをフィロナスが批判して行くという形になっており、「物質」の意味としては、「直接対象(immediate objects)」、「原型(archetypes)」、「道具[29](instruments)」、「機会因(occasions)」、「或る物一般(something in general)」という様なものがある(ii, 223)。知覚の相対性による議論の批判対象となっているのは、順序からして、そして議論の性格からして、明らかに知覚の「直接対象」としての物質である。該当するコンテキストで、非可視的性質について「論争するのは私の仕事ではない」(i, 185)とフィロナスが言明していることからもそれは言える。そして、知覚の相対性による議論というのは諸性質が外的対象のうちにないことを証明するものであり、そしてその限りのものだから、少なくともそこでは物質は性質の集合であってそれ以上のものであってはならない。

また、知覚の相対性による議論では、諸性質が外的対象のうちにないのは、ひとつの対象を成す性質が感官に相対的な様々の内容を同時に持つことが不合理であるゆえとされているが、この論法を完全に成立させようとすれば、外的対象のうちにあるいかなる性質（いわばdeterminables）[30]も各々決まった内容（いわばdeterminates）を持つ、という前提が必要である。ぬるま湯という対象の性質「熱」は決まった暖かさである、という前提があってはじめて、同一のぬるま湯が一方の手に暖かく他方の手に冷たいことが不合理となる。知覚の相対性による議論を行っているフィロナスとハイラスはこの前提を当然のことと承知していなくてはならない。「感官にどんな度合の熱を知覚しようと、それをひき起こす同じものが対象のうちにあることを我々は確信している」[31]（i, 175）というハイラスの言明にもそれは確認できると思う。(cf. i, 185, 186; P.C. 76)

要するに、『第一対話』の知覚の相対性による議論の批判対象となっているのは、直接に知覚される性質の集合であって、各性質の内容が一定である様な物質、ということになる。『第一対話』では、あくまでその様な特定の物質が批判対象であるという前提で、諸性質が外的対象のうちにないという結論が述べられていると言える。従って、ここでは、特定の物質概念が不合理に陥らざるをえないことが示されているにすぎず、諸性質が外的対象のうちにないという結論が無条件に得られているわけではないと思う。もしそうであれば、バークリにとって外的対象と心はいわばただ二つの「場所」[32]なのだから（§67）、諸性質は心のうちにある。とポジティブに明言されていてもよいはずである。ポジティブな表現も見られなくはない（i, 188）が、コンテキストから、それが「証明」の結論であるとは読み取り難い。[33]

むしろ、忘れてならないのは、ハイラスの「諸原理が懐疑論へ導かれるのを示す」のが「私の目的」であった（i, 206）、

という『第一対話』終末部でのフィロナスの発言であろう。懐疑論とは、バークリによれば、あらゆる事柄について肯定か否定か「未決定(suspense)」(i,173)であることを意味する。だから、『第一対話』の知覚の相対性による議論は、基本的に、知覚の直接対象として物質という概念を持つハイラスが諸性質について肯定も否定もできなくなってしまうことを示すためのものであることになる。[34]

『原理論』(1710.5)の副題――「ここで、諸学に於ける誤りと困難の主たる原因が懐疑論、無神論及び無宗教の根拠と共に探究される」――から分かる様に、懐疑論はバークリ自ら最も反対するもののひとつであった。しかし、パーシヴァル(Percival)への手紙[35](1710.9.6)でバークリは、『原理論』に与えられた二つの批難のうちのひとつに、性急な人々がバークリを「懐疑論者と混同しがちである」ことを挙げている。そして『対話』(1713)は『原理論』の内容を「より明晰にそして充分に論じる」(Preface)ために著された。これらの事実を考慮に入れると、『第一対話』に於ける知覚の相対性による議論が右の如き性格であることをより確かに主張できるであろう。

結局、『第一対話』では知覚の相対性による議論が、懐疑論につながる特定の物質に適用されているということに着目すれば、『第一対話』でも『原理論』と同様、バークリは知覚の相対性による議論が無条件に有効であるとは信じていないとみることができる。

ところで、バークリは、知覚の相対性による議論に対して不満を示しながら、それに代わる方法を提出していない。大まかに言えば、バークリは存在者の三項図式(物質―観念―心)から、esse est percipi により「知覚されずに存在する」物質を消去し、観念と心だけを残す。そして、りんご、石、樹木、本という事物(thing)は観念の集合とされるので、従来事物を構成する役割を担ってきた「性質」は当然の様に観念と同一視される。そして、観念は三項図

式に於て「心のうちにある」という特性を持っていたが、それは依然残されているので、[36] バークリは性質が心のうちにあることの証明を必要としないのである。換言すれば、esse est percipi により物質を消去する段階で「証明」は済んでしまっている。

バークリが著作を公けにするまでの思考過程が記されている『哲学評註』をみると、当初、知覚の相対性による議論はバークリにとってひとつの有効な議論であった様である (20, 63)。しかし、esse est percipi が「発見」される (279) 頃には、この議論に対して否定的な評価が下されている (265, 363)。ここに、esse est percipi の「発見」が知覚の相対性による議論を不要にしていることを見て取れないか。

五

もはやバークリにとって知覚の相対性による議論は本質的でないと言わざるをえないが、知覚の相対性という事実はなお意義を持つ。知覚の相対性による議論に不満が示される際、その様な論法は「どれが対象の真の (true) 延長か色かを我々は感官によっては決めることができないということを証明するにすぎない」(§15) と述べられていたが、それは取りも直さず、感官によって真の延長や色を決めることができないことをバークリが認めているということである。即ちバークリは、各性質の様々の特殊な内容のうちのどれかを true としてそれに特別な地位を与えるということを拒む。バークリにとって、ろうそくの光で見る色が apparent で、太陽のもとで見る色が true、というのではない。両者は対等である。そして、両者が共に apparent か true かは問題ではなく、等しく感官の観念であるという意味で real である (§36) ことだけが肝要なのである。[37] この様な思想をバークリは特に大きさ、形という第一性質

に於て徹底させて行く。

例えば、四角くて大きな建物が遠くから小さくて円い塔に見えるとする（Alci. IV §§8, 9）。普通、四角くて大きな建物が true で、小さくて円い塔が apparent だと考える。バークリには true—apparent という区別はない。「なぜ遠い距離で見られた大きさではなく近い距離で見られた大きさが真の大きさとみなされるべきなのか。」（P.C. 311）形についても同様である。だから、小さくて円い塔も四角くて大きな建物と等しく realであるにとどまる。小さくて円い塔を見ているとき、四角くて大きな建物が遠くからそう見えている、というのではない。そのとき、我々は四角くて大きな建物とは全く別個の小さくて円い塔を知覚しているのである。四角くて大きな建物と小さくて円い塔はひとつの対象の二つの姿ではなく、互いに独立した二つの別個の対象なのである。従って、もし知覚者が前進して行くとすれば、その間「次々と続く可視諸対象の連続した系列 (a continued series of visible objects succeeding each other)」(i, 201) が知覚されることになる。[38] そして視覚(sight)だけについて言えば、小さくて円い塔が、大きくて四角い建物より知覚者から離れているということはない。小さいということや円いということは距離と何ら必然的関係はない。そもそも視覚対象のうちに距離との必然的関係を示すものはない。距離は「本来触覚に属する (properly belongs to touch)」(N.T.V. §50) ものであり、視覚によって直接に知覚することはできない。ただ過去に於ける視覚と触覚の「習慣的結合 (a habitual connexion)」(op. cit. §147) によって視覚対象が距離を示唆 (suggest) する様になっているにすぎない。即ちここでバークリは自ら許した意味での抽象 (abstraction)(intro. §10) という手続きを視覚対象と「習慣や経験 (custom and experience)」(N.T.V. §26) の間に大担に行使することによって、視覚の固有対象 (proper objects) は「色の多様(diversity of colours)」のみであり (op. cit. §158)、距離を含まないことを示

そうとしている。

「離れた」対象を見てはいないことを示そうとしたのが『視覚新論』であり、そしてバークリ自身その成果が非物質論にとって必要と考えていることは『原理論』(§§42-44) あるいは『対話』(i,201-2) に明らかである。なぜ必要なのか。物質を消去しながらもバークリは依然観念が心のうちにあると前提しているのであるから、観念の集合たる「事物」も心のうちにあることになる。しかし、「事物は心のうちにある」という命題が「観念は心のうちにある」という命題と同じ容易さで受け入れられるとは思えない。[39] そこで、我々は「離れた」事物を見ているのではないと考えることが、「事物は心のうちにある」という命題に伴ういわば心理的抵抗を軽くする役割を果たすことになる。これが非物質論に対する『視覚新論』の役割ではないか。バークリは第一性質の知覚の相対性に於て視覚対象から「習慣や経験」を抽象するという手続きにより、我々は「離れた」事物を見てはいないとし、そしてそのことによって非物質論の心理的確証を得ようとしている。知覚の相対性という事実は、バークリにとって、物質論批判の論理的な手段として意義があるのではなく、むしろ、特に第一性質に於ける知覚の相対性[40]が物質論批判の結果を心理的に基礎づけようとする際に重要な役割を果たしていると言えるであろう。

六

バークリ自身『原理論』(§44) で認めている様に、『視覚新論』では触覚対象が心の外にあると仮定されていた。[41] だから、そこで示されたのは、事物を構成するもののうちの視覚的要素が心のうちに存在するということのみであることになる。触覚対象も心のうちに存在するというのがバークリの本意である様だが、そのことはいかにして可能な

のか。それが示されなくては、事物が心のうちにあるという心理的確証は不充分なままである。その辺のバークリの自覚は全く明確ではない。しかし、それ以前の問題、視覚のレベルの問題ですでにバークリは自ら破綻を露呈している様に思える。延長がいかにして心のうちに存在しうるのかという問いに対し、『原理論』(§49) では、「様相とか属性という仕方ではなく、観念という仕方でのみ (only by way of ideas)」心のうちに存在すると弁明されている。しかし、それで、いかにして延長が広がりのないもののうちに存在しうるのかという問いに対する答えとなるであろうか。また『原理論』の同じ節に、「延長が心のうちにあるからと言って魂や心が広がっていることにならないのは、色が心のうちにあって他のどこにもないとあまねく認められているからと言って心が赤いとか青いとかならないのと同じである」、ともある。これも対人立証の議論であるが、ここではバークリは議論の性格を把握していない。色が心のうちにあっても心が赤いことにはならないということまで示されなくては、心が広がっている必要はないという結論それ自体は得られないからである。同じ問いに対して、『対話』に至っては、「心のうちに存在する」という語句は単に「知覚する」という意味であって「全く文字通りに (in the gross literal sense)」とられてはならない (iii, 250)、と逃れる。しかし、「心の外にある」即「離れている」という前提 (N.T.V. §41; Alci. IV §9) のもとに、視覚対象が離れてはいないことを示そうとしたのが『視覚新論』ではなかったか。[42] 非物質論の心理的障害のひとつ、「距離」に於ては、第一性質の知覚の相対性を基礎にその解決を試みることができたが、「広がり」の問題に至って試みは頓座している様に思える。『視覚新論』を非物質論への心理学的な準備とみれば、それは後の発展をみなかった仕事と言える。無論、『視覚新論』の意義は非物質論への準備に尽きるものではない。

注

(1)使用したテキストは、『視覚新論(*An Essay Towards a New Theory of Vision*)』(N.T.V.と略記)、『人間知識の諸原理に関する論文(*A Treatise Concerning the Principles of Human Knowledge*)』(大槻春彦訳『人知原理論』岩波文庫、一九五八年)(『原理論』と略記)、『ハイラスとフィロナスの三つの対話(*Three Dialogues Between Hylas and Philonous*)』(『対話』と略記)、『アルシフロン(*Alciphron*)』(Alci.と略記)、『視覚論弁明(*The Theory of Vision (or Visual Language Shewing the Immediate Presense and Providence of a Deity)Vindicated and Explained*)(T.V.E.E.と略記)、『哲学評註(*Philosophical Commentaries*)』(P.C.と略記)で、頁付け等はA.A.Luce and T.E.Jessop(eds.), *The Works of George Berkeley*(London, 1949-58)(*Works*と略記)に従った。『原理論』と『対話』は書名を省き、前者は節の番号、後者は対話の番号と頁のみを記した。

(2) John Locke, *An Essay Concerning Human Understanding*, ed. P. H. Niddith (Oxford, 1975)(大槻春彦『人間知性論』岩波文庫、全四冊、一九七二—七七年), IV.xvii, 21.

(3)想像の観念(§30)と異なり、夢や狂気の観念は、それ自体としては、感官の観念と同じくらい「生き生きとして自然で(lively and natural)」ありうるが、ただ継起的な並び方が違う(iii, 235)、とバークリは考える。

(4)この様なバークリの議論は「経験的内容を欠く理論は経験的根拠に基づいて攻撃されるべきでない」という要求に合致する、とベネットは評価している様である。J.F. Bennett, *Lock, Berkeley, Hume; Central Themes*(Oxford, 1971), p126.

(5)対人立証の議論は後述のものの他に§§10, 11, 19, 47; P.C.874

(6)この様なやり方はピエール・ベール(Pierre Bayle)の影響である、とはポプキン、カミンズの指摘するところである。R.H. Popkin, 'Berkeley and pyrrhonism,' in C.M. Turbayne (ed.), *A Treatise Concerning the Principles of Human Knowledge with Critical Essys*(New York, 1970) (orig. *Review of Metaphysics*, Vol.5, 1951); P.D. Cummins, 'Perceptual relativity and ideas in the mind', *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol.24, 1963.

(7) R. Jackson, 'Locke's distinction between primary and secondary qualities', in C.B. Martin and D.M. Armstrong (eds.), *Locke and Berkeley*(London. 1968) (orig. Mind, Vol. 38, 1929).

(8) Locke, ibid., II. viii. 8.

(9) Locke, ibid., II, viii, 21.

(10) P. Alexander, 'Boyle and Locke on primary and secondary qualities', in I. C. Tipton (ed.), *Locke on Human Understanding* (Oxford, 1977) (orig. *Ratio*, Vol. 16, 1974), p70; J. L. Mackie, *Problems From Locke* (Oxford, 1976), p23.

(11) Locke, ibid., IV iii, 16.

(12) Locke, ibid., II, viii, 13.

(13) 歴史的に言って、その様にして第一・第二性質の区分を正当化した者は見当たらない、とカミンズは示唆している。Cummins, ibid., pp204-5.

(14) ロックは第一性質に於ても知覚の相対性を認めている (Locke, ibid., II, xxviii, 12) とする注釈家さえいる。M. Mandelbaum, *Philosophy, Science, and Sense Perception* (Baltimore, 1964), pp18-19.

(15) ウールハウスの指摘する様に、我々の感官が充分に鋭くないゆえに知覚されえないのか、我々がしかるべき感官を欠いているゆえに知覚されえないのか明白ではない。R. S. Woolhouse, *Locke's Philosophy of Science and Knowledge* (Oxford, 1971), p112. しかし、「知覚のヴェール原理 (the veil of perception doctrine)」ゆえでないことは確かである。I. C. Tipton, *Berkeley: the Philosophy of Immaterialism* (London, 1974), p358.

(16) 倒立像の問題 (N. T. V. §116) についてもそれが言える。

(17) 「我々の感覚が、粒子の形態、数、運動、そして大きさから生じる力能の結果であるというのは確実に偽でなくてはならない」(§25)、とロックの第一・第二性質に類した概念も批判されてはいる。ただ第一・第二性質として批判されてはいない。

(18) Locke, ibid., II, viii, 15. cf Bennett, ibid., pp118-119; Mandelbaum, ibid., pp17-18, pp21-22.

(19) Tipton (ed.), ibid., Editor's Introduction p8. ボイル (R. Boyle) とロックが色や味などを「性質」としたのは「日常の慣用に不必要に立ち向かわないでおこうという彼らの欲求のしるしであり、多分また彼らの生得の常識のしるし」である、とティプトンは指摘している (Tipton, ibid., p31)

(20) Lock, ibid., II, viii, 8.

(21) H. M. Bracken, *Berkeley* (London, 1974), p53.

(22)プラッケンはさらに「バークリがベールの議論を知っていたことを我々は知っている」という理由を挙げている(Bracken, ibid., p53)。

(23) Locke, ibid., II, viii, 21.

(24) Jessop, *Works*, Vol. II, p192n, cf p44n. cf. Tipton, ibid., p237; K. Marc-Wogau, 'The argument from illusion and Berkeley's idealism', in Martin and Armstrong (eds.), ibid., (orig. *Theoria*, Vol.24, 1958).

(25) Tipton, ibid., p238.

(26) Tipton, ibid., pp39-40, pp236-240.

(27) Tipton, ibid., p238.

(28)ひとつの文を二つに分けたため原文と訳が正確に対応しないが、ここでは支障ない。

(29)神が我々の観念を生み出すための「道具」である(iii, 217-19)。

(30) cf. P. D. Cummins, 'Berkeley's likeness principle', in Martin and Armstrong (eds.), ibid., (orig. *Journal of the History of Philosophy*, Vol. 4, 1966)

(31)「ひき起こす (occasions)」という語に知覚の因果説的意味はない。知覚された熱とそうでない熱を区別しようとするハイラスに対し、「我々の語は可感的事物に関して進行している」とフィロナスがそれを否定している (i, 180) ことから、明らかである。

(32) G. J. Warnock, *Berkeley*, Peregrine edn. (London, 1969), p149.

(33)『第三対話』でも知覚の相対性に言及されているが、それは、実在性を不変なものにではなく「うつろい易く、実際、変わり易い観念」に置く (iii, 258) ことを主張するためであり、「証明」のためではない。

(34)『第一対話』では、あなたの考えに従えばかくかくの帰結になる、という形のフィロナスの発言が他の二対話に比較して目立つ (i, 179, 184, 189, 190, 197, 206; ii, 212, 225, 226)。その数と配置から、『第一対話』はフィロナス自ら何かを主張するというより、相手を何かへ導くことが基調になっていることを窺わせる。

(35) *Works*, Vol. VIII, pp36-37.

(36)その意味で「バークリはロック的枠組み (the Lockian framework) の中で働いている」(Tipton, ibid., p85) と言える。

(37)「あなたに従えば事物の現れ (appearances) にすぎない知覚の直接対象を私は実在物そのもの (the real things themselves) と考える。」(iii, 244)

(38)「名前の限りない数と混乱が言語を非実用的なものとしてしま」わない様に我々無数の「可視的諸対象」をひとつの名前で呼んでいるにすぎない (iii, 245)。

(39) cf. Aschenbrenner, 'Bishop Berkeley on existence in the mind', in S. C. Pepper et al. (eds.), *George Berkeley: Lectures Delivered before the Philosophical Union of the University of California* (Berkeley, 1957), pp45-46.

(40)特にN. T. V. §44。

(41)バークリが誤って仮定してしまっていたというのではない。『視覚新論』(1709) が著される時点ですでに『原理論』(1710) の内容が考えられていたことは『哲学評註』(1707-8) に明らかである。あくまで「視覚に関する論議でそれを吟味し反駁することは私の目的であったから」(§44) そう仮定していたのである。「しかし、誰が『視覚新論』だけを読んで、バークリが第一性質から成る事物、また、触覚器官によって直接に感知される性質から成る事物の実在性を否定していると推測したであろうか」というサリヴァンの言は興味深い。 C. J. Sullivan, 'Berkeley's attack on matter', in Pepper et al. (eds.), ibid., p24.

(42) cf. Aschenbrenner, ibid., p45.

付記　本稿は日本哲学会第三十九会大会（一九八〇年五月三十一日、六月一日　金沢大学）に於ける一般研究発表に加筆したものである。

（博士課程学生）